弥生

vol. 9

02-03　神々のおはす島～壱岐で出会う信仰の姿～

04　―季節のアルバム―「例大祭」・掲示板

05　『大祓詞』書写会

06-07　ワークショップ「端午の節句と薬玉づくり」

08　ワークショップ「笹の葉飾りと七夕祭り」

09　―東北だより―「千度大祓」と「請戸の田植踊」

10　二十四節気と日本の風習(三) ～立秋から霜降～

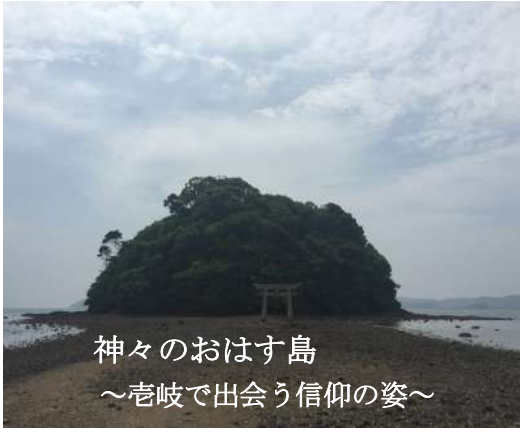
11　古今のうた「神々と島」

12-13　music「神々のいる島」と聞いてイメージする音楽は？

14　本を読む。「島を考える本」

15　旅の止まり木・3「島はどこにでも」

（第9号秋）平成28年11月発行　弥生神社　046(231)2595/ email:yayoi-jinja@amber.plala.or.jp



小島神社　壱岐の小島に鎮座し島全体が神域。干潮時に参道が現れる。（平成28年5月）

春五月、長崎県壱岐島を訪ねました。

国生み神話と「神々の島」壱岐

壱岐は、九州北方の玄界灘にある島であり古くは「伊伎」、「一岐」などの字が用いられたが、「由伎」とも書かれ、「雪の島」ともいわれた。奈良時代に編纂された『古事記』の国生みの神話にその名が明記されている。

―天つ神の命によって伊邪那岐命（いざなぎ）と伊邪那美（いざなみ）命の二柱が、天浮橋から天沼矛で海を掻き混ぜ、その矛を引きあげると濃い塩がしたたり落ち、積もり積もって島ができた。それが淤能碁呂（おのごろ）島である。二柱の神はこの島に降り、次々と島を生んだ。淡路の穂の狭別（さわけ）の島（淡路島）、伊予の二名の島（四国）、隠岐の三子の島（隠岐）、筑紫の島（九州）、伊岐の島（壱岐）、津島（対馬）、佐渡島、大倭豊秋津島（大和を中心とした畿内）…ここで生まれた八つの島は「大八島」といわれた。日本の古い呼び名である。五つめに生まれた島、壱岐は別名を天比登都柱（あめひとつばしら）という―。

そして壱岐には、京都の神社に分霊したため「神道の発祥」といわれる月読神社をはじめ、平安時代の『延喜式』神名帳に記載される式内社が二十四社も鎮座している。また、神職により七百年にわたって伝承されてきた「壱岐神楽」は国の重要無形文化財に指定されている。このような歴史的文化的背景を持つゆえに壱岐は「神々の島」ともよばれる。

由緒ある神社だけではない。この島を歩くと、古くからの様々な信仰が今も息づいているのに出会う。港には注連縄を張った神域にご神体の石が並び、森林の中や道端には祠や石仏などがいたるところにある。また、『壱岐島の民間信仰神』には、ミサキ神、竜神、蛇神、河童神、柴取り神、石神、樹木神、牛神、火難除けの神…など、壱岐に伝えられてきた多くの民間信仰神が紹介されている。

原の辻遺跡と古墳群

壱岐は古くからアジア大陸と日本を行き来する寄港地として栄えた。三世紀末に記された中国の歴史書『魏志』倭人伝に、壱岐は「一支国」として記され、弥生時代の大環濠集落である「原の辻遺跡」はその王都と考えられている。この集落の最も高い場所に、神饌膳（しんせん）を並べ祭祀や儀式を行ったとされる祭儀場の建物跡や祭器、儀器を収めたとされる倉の跡があり、何らかの「神」を祀っていたことがうかがえる。

さらに壱岐には、五世紀から七世紀前半にかけて造られた古墳が、二八〇基も確認されている。豪族たちが自ら永眠する墓に権威を示し死後への様々な思いを込めたのだろう。ちなみに後世になると、人々は巨大古墳を人間の技を超えたもの、鬼が造った棲家と考え、「鬼の窟（いわや）」、「鬼屋」と呼んでいたそうだ。島にはまた鬼退治伝説も残り、「鬼凧（おんだこ）」という民芸品として具現化されている。―見えないものの存在や力を信じるかつての人々の心を想像する。

このように、壱岐にはその繁栄とともに様々な神を祀る人々の信仰の姿があった。

月読神社

鬼の窟古墳の石室入り口

後に伝わったキリスト教も厳しい弾圧の中、信徒たちによって守られ、現在、島にはキリスト教会とともにかつての信仰の跡がある。

マリア観音とメンシアの拝塔

壱岐は近世には平戸藩に属し、教会文献では「ユキノシマ」で知られる。キリシタン史上はあまり登場せず、はじめて教会文献に出るのは、一五七八年（天正六）である。漂流した宣教師たちを平戸藩主松浦隆信・鎮信父子が迎えている。また、日本人一家の洗礼の記録が一つだけある。隠れキリシタンのいた形跡もあるが定かにはなっていないという。

壱岐へと旅する前、あるガイド本にあった「マリア観音」の写真が心をとらえた。禁教時代の隠れキリシタンが礼拝対象にしていた、観音像を模したマリア像である。もともとの所在など、この像をめぐる情報はほぼないまま、とにかく会いに行くことにした。

その「マリア観音」は道沿いにひっそりと座していた。小雨で湿った林の中を探し歩き、あきらめかけたころ行きに通ったはずの道すがら、壱岐八十八ヶ所第四番長泉寺跡にある小さなお堂の傍らにその像はあった。幼子を抱き、乳房もあらわにした「マリア観音」は、信徒の純粋で切実な信仰を受けとめていたであろう優しさと穏やかさを表情にたたえていた。

次に出会ったのが、安国寺境内にたたずむ「メンシアの拝塔」である。その水盤は「日月水盤」と呼ばれ、マリアとキリストを象徴する三日月と太陽を組み合わせたキリスト教的な特徴が見られる。また、風化のために確認できなかったが、台石の表面には、キリストの象徴とされる魚と蟹のようなレリーフがある。

平戸藩主松浦久信の妻メンシアについては、次のような記録がある。―メンシア（本名不詳）は、キリシタン大名大村純忠の五女として生まれ、自らもキリスト教を篤く信仰していた。一五八六年、純忠は南蛮貿易で敵対していた松浦氏と和睦するため、松浦鎮信の息子久信にメンシアを嫁がせた。メンシアの信仰を守らせれることが条件だったが、婚姻後、松浦家はメンシアに棄教を迫った。翌年、豊臣秀吉による「宣教師追放令」の発布により、キリスト教への圧力は強くなった。それでもメンシアは棄教を拒み続け、ついには夫に離縁を申し出たが、久信はメンシアの信仰に理解を示し、メンシアが礼拝できるよう屋敷の中に小さな聖堂を作ったという。久信の死去後、メンシアは六十六歳のときに幕府からの命令で江戸の広徳寺に監禁された。そして八十五歳での死後、平戸に戻され久信とともに松浦家の墓に眠っている―。

人々の信仰を一身に受けとめたマリア観音、信仰に身を捧げたひとりの女性の人生、歴史に埋もれた無数の人々の悲哀と信仰の強ささに胸を突かれる思いがした。

この島国にはその土地ごとに様々な神が祀られ、信仰が育まれてきた。海を渡り伝わった信仰、自然への畏敬の念から生まれてきた信仰…それらが数々の葛藤や融合、変化を経ながら多様に併存し、人々はそれぞれの「神」を心に抱き生きている。そのことを心に置きつつ歴史を振り返れば、信仰の自由ということの意味の重さをあらためて感じる。

【参考】倉野憲司校註『古事記』岩波文庫／壱岐市観光協会発行・笹生衛監修『壱岐事典』／壱岐市立一支国博物館『海の王都・原の辻遺跡と壱岐の至宝』／壱岐文化財調査委員会編『壱岐島の民間信仰神』昭和五十／壱岐市教育委員会編『壱岐の島の古墳群』平成二十四／片岡弥吉『日本キリシタン殉教史』（平成二十三）智書房他

マリア観音

松浦久信（右）とメンシアの拝塔

日月水盤

平成二十八年四月九・十日
弥生神社例大祭

快晴のもと例大祭を斎行いたしました。

境内で催された演芸ステージ

掲示板

厄除招福・家内安全・合格祈願・商売繁盛・社運隆昌など祈祷（きとう）を行っています。

境内・社務所にてお神札、お守りを頒布しています。

平成二十八年度「年越の大祓（おおはらえ）」
十二月三十一日　午後三時より

どなたでも参列できます。

おおはらえのことば

『大祓詞』書写会

千三百年にわたり伝わってきた『大祓詞』は、罪穢れを祓い清める祝詞です。現在では六月と十二月に行われる大祓式で奏上します。弥生神社では『大祓詞』を自由に学びながらマイペースで書写をする会を開いております。どなたでもご参加できます。文字を書きながら集中することで心静かな時間をお過ごしください。

五月二十二日に大祓詞の書写会が行われました。当日は筆自慢の人が多数参加され、真剣な面持ちで約二時間集中して取り組んでおられました。私も初めての参加で筆を長時間持ち、集中して取り組んだのは初めての経験でしたが、静かな雰囲気の中、大祓詞の詞を勉強しながら筆を走らせ、あっという間の時間が過ぎてしまいました。人間はたまには集中、気を引き締めて精神統一をするということが大事であると実感した次第であります。今後も開催時には積極的に参加し大祓詞に親しみを感じながら書写を楽しんでいこうと思います。

熊切正巳

＊『大祓詞』の世界をわかりやすく描いた『大祓詞物語』をお配りしています。

＊お手本を写したり見て書いたり好きな方法で取り組んでいます。

書写会は、二月に一度のペースで行っています。初めての方もお気軽にお越しください。中高生でも大丈夫です。境内の掲示板やご希望の方には御葉書で、オンラインでは弥生神社のTWITTER、FACEBOOKでご案内しております。

季節の手づくり和菓子もお楽しみに。

端午の節句と薬玉（たんご　せっく　くすだま）づくり

新暦の「端午の節句」に合わせ、五月一日に薬玉作りのワークショップを開催しました。

拝殿で参拝した後、まずは「端午の節句」について学び理解を深めてから、「薬玉」作りに取り組みました。

日本人は端午の節句の日、不浄や邪気を祓い厄除けや長寿を祈る縁起物として、薬玉を柱や御簾に飾ったといわれています。薬玉には、種々の香料や薬草を玉にして錦の袋に入れたものを中にいれ、糸で飾ったそうです。平安時代より『枕草子』『宇津保物語』、『源氏物語』、『今昔物語集』など文学作品の中に「薬玉」の語が使われています。江戸時代以降も、俳句や小説の中にたびたび登場します。

このたびのワークショップでは、乾燥した蓬と香り菖蒲、甘松や丁子を和紙や絹布で包んで薬玉の中に入れ、飾り紐や菖蒲、蓬の生葉で飾りました。ご参加の方それぞれが工夫を凝らして、色とりどりの薬玉が完成しました。

乾燥した「香り菖蒲」

丁子と甘松（かんしょう）

天日干しをした蓬

菖蒲と蓬の生葉

手づくり蓬団子

～「端午の節句」と菖蒲～

中国では「端午」の日（月の端はじめの午の日）に薬草を摘んで野遊びをする、蓬で作った人形を戸口に掛けて毒気を祓う風習があった。奈良時代には日本でも同じような風習が年中行事としてあり、平安期には菖蒲蔓（かずら）を身につける儀式が宮中でも行われていたという。民間でも邪気を避け魔物を祓う薬草「菖蒲」を、蓬と共に軒にさし、湯に入れて「菖蒲湯」として浴したという。江戸時代には、武家社会を背景に「菖蒲」と「尚武」をかけた尚武（武士を尊ぶ）の節句へと移り、男の子の誕生と成長を祝うお祭りとなった。（参考：國學院大學日本文化研究所編『神道辞典』、川口謙二『年中行事・儀礼事典』）

ご参加の皆さんが工夫を凝らして、様々な薬玉が完成しました。

会場には、薬玉に入れる薬草類の他、身近な「薬草」をご紹介するため、弥生神社の周辺で採集した約二十種類の植物を並べました。ヘクソカズラ、ヤマブキ、ギシギシ、ヘラオオバコ…。私たちが「雑草」と呼ぶ植物も、昔の人たちはひとつひとつに親しみ、特性と効用を知り、生活の中に取り入れていたのす。

春の一日、「端午の節句」の風習を追体験しながら、会場の様々な「薬草」に触れ匂いを嗅ぎながら、植物と先人たちとの深い関わりに思いを馳せました。

【薬玉】（くすだま）

５月５日の端午に、不浄を払い邪気を避ける具として簾（すだれ）や柱に掛け、また身に帯びたもの。麝香（じゃこう）・沈香・丁子など種々の香料を玉にして錦の袋に入れ、糸で飾り、造花に菖蒲や蓬などを添えて結びつけ、五色の糸を長く垂れる。中国から伝わり、平安時代に盛んに贈答に用いた。続命縷（しょくめいる）。長命縷。夏の季語。（『広辞苑』・第六版）

笹の葉飾りと七夕祭り

七月二日、三日に、新暦の七夕の日に合わせて、笹の葉飾りを作るワークショップを行いました。

五十センチほどの笹の枝葉を飾るお飾りは、吹き流し、網飾り、くず箱など基本は七種類。ひとつひとつの意味と作り方を確かめながら、和紙や千代紙で作りました。なかでも人形や衣を表す「紙衣（かみこ）」は地域によって様々で京都、黒部、松本などに伝わる紙衣をご紹介しました。

また、七夕の風習にならって梶の生葉に和歌や願い事を筆で書いて笹の葉にかけました。

『万葉集』には百三十首を超える七夕の歌が載っています。万葉の七夕歌を集めて表紙をつけて歌集を作りました。

梶の葉に墨で願い事や和歌を書きました。

～「乞巧奠（きっこうでん）」と七夕～

七夕は、牽牛（けんぎゅう）と織女（しょくじょ）の 二つの星が、一年に一度、７月７日に天の川を渡って再会するという中国の古代伝説にちなむ。中国には、この二人の逢瀬を祝う「乞巧奠」という行事があり、織姫にあやかり機織りの技が上手くなるように、さらには様々な手習いごとの上達を願願った。そして、「乞巧奠」が奈良時代に日本に伝わり、宮中の年中行事として取り入れられた。もともと宮中の行事だった七夕は、やがて江戸時代には幕府の大奥や大名などのあいだで流行し、しだいに民間に広まったといわれる。詩歌や裁縫の上達を願って星に祈りをささげたり、里芋の葉上の夜露で墨をすり、梶の葉に和歌をしためるなどしてお祀りをするようになった。

福島県いわき市小名浜「千度大祓」と「請戸（うけど）の田植踊」

七月十七日、福島県いわき市小名浜の「アクアマリン福島」にて、今年で六回めとなる東日本大震災「慰霊祭」ならびに復興祈願「千度大祓」が斎行されました。

「千度大祓」では福島県内外の神職と國學院大學の学生さん約百名が、参列の方々とともに『大祓詞』十巻を奏上いたしました。その後の「放生（ほうじょう）の儀」では、神職により鯵が小名浜港に放されました。「千度大祓」は、「いわき大祓の会」が主催し、震災を後世に語り継ぐとともに、豊かな海と生活を取り戻すことを願い、海の恩恵に感謝し、毎年国民の祝日「海の日」に合わせて行われています。

「千度大祓」に先立って行われた東日本大震災「慰霊祭」では、今年も福島県浪江町請戸（うけど）地区に伝わる「田植踊」が奉納されました。田植踊は、約三百年前から続く伝統芸能。毎年二月、五穀豊饒を願い地区の苕野（くさの）神社で奉納されていましたが、同神社は地震による津波で流され、地区は津波と原発事故の影響で避難指示区域となりました。そのため踊り手のメンバーも全国各地に離散しましたが、請戸芸能保存会の呼びかけにより各避難先から集まり、各地の神社や仮設住宅などで奉納、披露を続けてきました。今夏八月八日には伊勢の神宮において、まがたま池のほとりに設置された奉納舞台で、四～二十八歳の十七人の踊り手と三人の大人の歌い手によって奉納されました。

長い間、土地の人たちによって大切に引き継がれてきた芸能は、人々とふるさととの紐帯や心の復興へのきっかけにもなっているのではないかと、素晴らしい踊りを感慨深く拝見しました。（『伊勢新聞』八月九日、『福島民報』十月十五日　参照）

立秋から霜降

二十四節気と日本の風習（三）

立秋（りっしゅう）

（新暦 八月八日～八月二十二日頃）

「初めて秋の気立つがゆへなれば也」＊『暦便覧』より（以下、同）

「乞巧節（きこうせつ）」…旧暦七月七日はこの時期。中国では七夕を「乞巧節」といい、針仕事や技芸の上達を願った。

【旬の草花・魚介】ほおずき、水引、めごち、真だこ

処暑（しょしょ）

（新暦 八月二十三日～九月七日頃）

「陽気とどまりて初めて退きやまんとすれば也」＊

「野分（のわき）」…野を分け草木を吹き分ける台風などに伴う暴風。『枕草子』や『源氏物語』などでは台風を野分と呼んでいた。

【旬の果物・魚介】すだち・無花果・かさご・ぐち

白露（はくろ）

（新暦九 月八日～九月二十二日頃）

「陰気ようやく重なりて露にごりて白色となれば也」＊

◇明け方に葉草木に露が宿るようになる。

「秋の七草」…萩、なでしこ、葛、おみなえし、桔梗、藤袴、すすき

【旬の果物・魚介】梨、昆布・あわび・しまあじ

秋分（しゅうぶん）

（新暦 九月二十三日～十月七日頃）

「陰陽の中分となれば也」＊

◇秋分とは昼夜の長さが同じになる日のこと。

【旬の草花・魚介】銀杏、金木犀、はぜ、とらふぐ

寒露（かんろ）

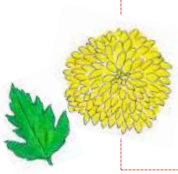
（新暦 十月八日～十月二十二日頃）

「陰寒の気に合って、露むすび凝らんとすれば也」＊

◇晩秋の頃、野草などに降り降りる冷たい露を寒露という。

「菊の節句」…旧暦九月九日は重陽の節句。菊の節句ともいわれ、菊酒を飲んだり菊枕を作って邪気を祓い長寿を祈ったとされます。

【旬の野菜・魚介】しめじ、さば、ししゃも、はたはた



霜降（そうこう）

（新暦 十月二十三日～十一月六日頃）

「つゆが陰気に結ばれて、霜となりて降るゆへ也」＊

◇寒さにあたって露が霜になり始めるころ。

【旬の草花・野鳥・魚介】紫式部・ひよどり・かわはぎ、ほっけ

（参考）矢嶋文子『旬のやさい歳時記』（平成二十六）主婦と生活社、白井名大『日本の七十二候を楽しむ―旧暦のある暮らし―』（平成二十五）東邦出版

古今のうた　神々と島

わたの原八十島（やそしま）かけて漕ぎ出でぬと
人にはつげよ海人（あま）の釣り舟

小野篁（おののたかむら）

「隠岐に流される時に、舟にのりていでたつとて、京なる人のもとにつかはしける　小野たかむらの朝臣」

【歌意】海原はるかに（大海を）多くの島々を目指して私を乗せた舟は漕ぎ出したと、都（京都）にいる私の親しい人に告げておくれ。そこにいる漁師の釣り舟よ。

「八十島」は瀬戸内海の島だが、当時の人々にとって海の彼方、異郷への憧憬を連想させた。難波の浦で行われた「八十島祓い」というみそぎの行事が人々の心に深い印象を与えていたことからも察せられる。作者の小野篁は、承和五年、遣唐副使に任ぜられたが、乗船のことで不満を持ち命に従わなかったので、隠岐に流された。難波から出帆し瀬戸内海を通り隠岐に行ったという。海上漂泊に旅立つ作者が抱く情感は、憧憬よりも悲しみだったろう。

【参考】岡野弘彦『祈りと悲しみの歌』（昭和六十一）講談社、佐伯梅友 校注『古今和歌集』（昭和五十八）岩波書店

おしてるや　難波（なにわ）の崎よいで立ちて我が国みれば　淡島　おのごろ島
檳榔（あぢまさ）の島も見ゆ　放（さけ）つ島見ゆ

仁徳天皇『古事記』

ひたすらに陽の没る方（かた）にむきて漕ぐ補陀落（ふだらく）の海といふはいづちぞ

岡野弘彦『滄浪歌』（昭和四十七）

海境（うみざか）に夕べの雲の畳はりまつろはざりし神ぞ親しき

三國玲子『蓮歩』（昭和五十三）

御嶽（うたき）といふ祠に燻り満つるほどの女の祈りひねもすつづく

比嘉美智子『青き地球』（平成八）

水脈ひきて天草をめざす小舟あり耶蘇教（やそきょう）もかく渡りてゆきし

大森智子『あべまきの林から』（平成十九）

都濃島は響の灘にうらうらに牛を飼ふなり木簡伝ふ

高崎淳子『難波津』（平成二十七）

（一首め）おしてるや…「難波」の枕詞／放つ島…放れ島（二首め）補陀落…南方海上にあるという観音の浄土（四首め）御嶽…琉球の信仰における祭祀などを行う場所（六首め）都濃島…角島。山口県下関市の日本海上にある。

『アルルの女』ビゼー

「荘厳さもあれば、牧歌的な雰囲気もある組曲。色んな神様がいて、祭りをしていたり、のんびり過ごしたりしているようなイメージが浮かんだ。ファランドールは神々のお祭り、メヌエットは水辺でくつろぐ女神の風景を想像した」aikaさん

『bali spa』
（MAHARANI RECORD）

「『神々のいる島』＝バリ島のイメージ。ガムランがとても良い。鳥のさえずり、波風や水のせせらぎ、青銅器や竹琴、笛…独特の旋律。バリの癒し音楽」Acoさん

『ナクソス島のアリアドネ』
R.シュトラウス

「ナクソス島はエーゲ海のキクラデス諸島に属する島。ギリシャ領。 人間の喜悲劇とともに神話があり、神々がいる」Satoさん

music

「神々のいる島」と聞いてイメージする音楽は？

「神、カミ、kami…」と聞いても心に抱く、イメージする「神」は人それぞれです。たとえば大海原や草木の匂い立つ島の風景と重ねた時、あなたはどんな音やメロディーを浮かべますか？他の人のイメージする「神々のいる島」を、音楽を聴きながら想像してみるのはいかがでしょう。眠っていた遠い記憶が呼び起こされたり、音の中で新しい風景に出会えたりするかもしれません。（＊20～50代の方々にお聞きしました）

『Les Nouvelles Polyphonies Corses』
Nouvelle Polyphonies Corses

「コルシカ島のポリフォニー。農業のワークソングと聖歌（賛美歌）とミックスされて生まれたものだそうです。それを世界のいろんなアーティストが参加してつくられた美しいアルバム。坂本龍一も参加していて一部で話題になりました」SENBEIさん

『あはがり』朝崎郁恵

「私は奄美ルーツの人間ですので、神々のいる島の音楽、といわれたらやっぱりシマウタとか。祭事に歌われる地元の言葉での唄が真っ先に思い出されます。『あはがり』とは、シマグチ（奄美の方言）で、『明るい』というような意味です。神々というか、巫女を主体とするシャーマニズムに近いイメージかもしれませんが」Junkoさん

『Harpe celtique & chants du monde』
Cecile Corbel

「ケルティックハープとセシルの甘く澄んだ歌声が奏でるケルト音楽。美しく不思議な響きの中に、大自然に宿る精霊や神々、その神秘的な魅力や厳しさを感じます。自然を神とする点でケルトと日本の神道に共通点があるせいか、どこか懐かしさも感じます」Nagisa さん

『葡萄』
サザンオールスターズ

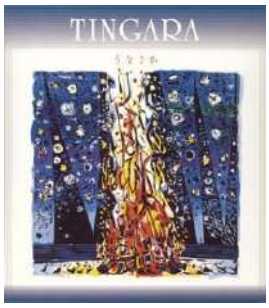
「『蛍』『平和の鐘が鳴る』は神様じゃないけど、人の魂の歌かな」 Sayakaさん

『神々の詩』姫神

「姫神にハマった初期のころは平安・雅って感じがしたんですけど、初代リーダーが亡くなってからかな？ 神々がキーになってきたのかな？ 司馬さんの街道をゆくのテーマ曲あたりから神化してゆくのかな？」鯛狸さん

＊＊＊

「沖縄の離島巡りにはまっていた頃に出会った曲。 照りつける太陽、どこまでも青い海、広がる青空、さんざめく草木たち、自然以外何もない…自然に抱かれている自分を知る。自然の圧倒的なパワーにけおされながらも、癒されていく自分。そんな自然は自分が生まれるずっと前からいる神様みたいな存在。そんなイメージにぴったりの曲」陽山さん



『うなさか』TINGARA

「収録されている『神々の時間』は、映画『地球交響曲第5番』テーマ曲。「うなさか」は「海界」の意」Kusumiさん

『神様の宝石のできた島』
THE BOOM

「もとはMIYA & YAMI の唄。僕らは急ぎ過ぎていただけだろう…満月の夜にはきっと見えるだろう。遠く離れてても世界のどこにいても♪」SHINOさん

『神々の森のケチャ』
ジンガパドゥ村のケチャ仲間

「バリ島のケチャはいいですよーぜひ現地で！ウルワトゥ寺院でのライブは観光公演ですがおすすめです」茗荷谷さん

『the memory of trees』
エンヤ

「人神無分別の4000年前のアイルランドにこだました神々のささやき」 G•Mさん

＊＊＊

「昔白馬に行ったとき、街灯のない森の中で車の灯りも全部消してこの曲を大音量で流したことがあって。その時の神秘的な空気が忘れられない」Akiさん

『クムイウタ』Cocco

「『クムイウタ』は琉球の方言で『子守り唄』。聴くと懐かしく現実も思い出も同じ夢の中のように感じて安堵する。うまくいくよう手を合わせた、家の裏手の雑草に囲まれた祠。泣きながら歩いた夕方の坂道。昔見た光景と思いが蘇ってくる。人の魂の痛み、どうにもならない切実な喪失感、絶望感、愛や人間の儚さ弱さ…すべてをのみこむ大海原と、その先にある一筋の光を感じさせる曲」 Natsuさん

本を読む。

～「島」を考える本～　今回は「島」をキーワードに五冊を選んでみました。海の向こうに浮かぶ別世界。一見のどかに見える風景が、変わった様相で見えてきます。

小河洋友（図書館司書）

ちくま文庫

柳田国男全集　1

柳田国男［著］

筑摩書房　1989.9

日本人は如何にして渡ってきたのか？はるか南方から稲をたずさえて北上してきた日本人の起源を探る雄大な仮説「日本人南方渡来説」を示した『海上の道』、海島民族である日本人の移住、信仰、文化の問題にふれた『島の人生』などを収録しています。

新潮文庫

波のむこうのかくれ島

椎名　誠［著］

新潮社　2004.3

日本一の「島旅作家」椎名誠さんが訪れたとっておきの島々。海が広い！空が青い！魚は新鮮で酒がうまい！長年の憧れだったトカラ・宝島に上陸し、小笠原でクジラに遭遇、硫黄島では究極の露天風呂を満喫…潮風に吹かれさすらうがままに綴ったニッポン離れ島紀行です。

日本の島443　有人島全収録

原色　**日本島図鑑**

加藤庸二［著］

新星出版社　2013.4

北海道から南西諸島まで！四四三もの島を美しい写真で紹介しています。島の基本データの他、景観、祭りや行事、普段の生活の写真を掲載。島名、地図からも検索できるようになっており、島データブックとして活用できるようになっています。

絶海の孤島　補改訂版

カベルナリア吉田［著］

イカロス出版　2015.12

青ヶ島、対馬、悪石島…本州「大陸」から遠く離れ、大海にポツンと浮かぶ「絶海の孤島」。海に隔てられた分ひときわ独自の空気感や生活習慣を育んでいる場所が多いとのこと。遙かなる海を渡り、その先に浮かぶ「もう一つの日本」を紹介しています。

ものと人間の文化史175

島

田辺　悟／［著］

法政大学出版局　2015.11

独自の宗教や祭儀を通して、島の精神性に及ぶ島嶼文化論です。島に伝えられ、温存されてきた文化的要素を探り出し、検証することで日本文化の古層や重層性（伝統）を実証することができるとのこと。日本誕生神話の謎や、南洋諸島の巨石文化についての記述があります。

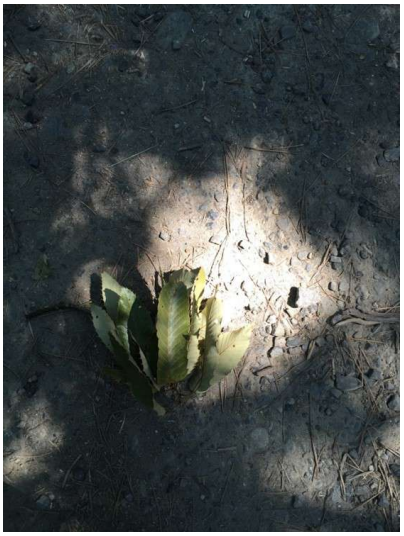
エッセイ　旅の止まり木・3

島はどこにでも

谷口明子

旅はただでさえ楽しいが、「島に渡る」となるとさらに高まる。そもそも島国である日本に生まれ育ったのに、それでも「島へ行く」ことにスペシャル感を覚えてしまう不思議。そしてスペシャル感は、行く島が小さいほど増すようだ。例えば北海道も沖縄も本州在住の者からすると海を越えていく「島」と言えるが、北海道本土よりも礼文島や利尻島、沖縄本島よりも久高島・・・と考えながらも今私の脳裏に浮かんだのは実は瀬戸内海の島々で、なぜならこの夏に行ったばかりだからです。

ちょうど「瀬戸内国際芸術祭」が開催されていて、島のあちこちに美術作品が設置され、海外からの観光客もたくさん来ていた。私はこういった作品を見るのが好きなので楽しんだが、地元島民の中には、島おこしになって喜ばしい面白いと思っている人もいるであろう一方で、よそから人がたくさん来て騒がしくて面倒くさいなと思っている人もいるだろうな、と想像しつつ島を歩いた。どこかで日よけの帽子を失くして苛烈な日射しに直接焼かれながら歩いていたので、（乗り気な人達と面倒くさくて閉ざしている人を図にすると乗り気な人達は一体となってその場を満たす水のようで、閉ざしている人はその中に点々と浮かぶ島のようだな・・・島は時に水をかぶって）みたいなこと以上は考えられなかった。



豊島の林の中

さて、では改めて、「島」の何が人にスペシャル感を抱かせるのだろうと考えると、「地続きでない」つまり「つながっていない」という点であり、これだけ「つながること」が良きこととされ推奨される世の中でも、「どこともつながっていない」場所はどこか人の深部を静かに興奮させずにおかないようだ。こちらとつながっていないあちらでは、何か異質な世界が広がっているのではないか、と、不穏な中にもわくわく感と希望が混然一体となったような気持ちがかき立てられる。

また、自分自身も、自分次第でわりといつでも「孤島」になれる。旅先でなくても、夜ドアを閉めた部屋で一人ビールをすすっている自分は部屋ごとぽっかりと「孤島」だし、地下鉄で目を閉じて意識をオフにしている数分間の自分も、群衆の中の「孤島」である。自分と向き合うとかそういうことではなくて、ただただ、切り離されて浮かぶのだ。島は、こうして至るところに出現する。

（陶芸家）

七五三詣おめでとうございます

満月と菊、うさぎを描いたお守りと絵馬です。七五三詣の季節に合わせてデザインしました。

綿ちりめんの巾着と髪飾りです。七五三詣の記念になるよう心を込めて手づくりしました。

社務猫のつぶやき

私は思索する猫。猫部屋の窓からヘチマの花や蝶を眺めたり。じーっと外を見て思索にふけっています。札所からはこうして皆さんを観察しているの。

きーこ

私は行動する猫。夜でもよくおでかけして心配されるの。帰ってからいただくスープは最高よ。皆さんは真似しないでね。

ちょろ

編集後記

七五三詣おめでとうございます。菊の花が咲き、銀杏の葉が色づき始めるこの頃、お祝いのお子様の晴れやかな笑顔で境内も華やいでいます。お子様の健やかなご成長をお祈りいたします◇第九号が発行となりました。ご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。冬も近づき寒さも増す頃の発行となりましたが、テーマは「神々のおはす島」。夏の余韻を残す内容になりました。春には記事にしました壱岐へ。夏には山口県の祝島に渡り、四年に一度の「神舞」を観に、そして沖家室島の神社参拝へ。猛暑とともに忘れえぬ貴重な体験でした。島の続編ができそうです◇壱岐の近くの無人島、辰の島に渡った際、希少な海浜植物に遭遇し息をのみました。私の生きる場所はこの国のほんの一隅でしかないことを実感しました。自然の世界はもとより他の土地の文化や暮らし、信仰についても知らないことが多く、「無知は無理解を生み無理解は偏見を生む」という言葉が思い出されます。知ろうとする気持ちを忘れずにいたいと思います。◇平成二十八年も終わりに近づき、年末年始の準備をしております。お正月にはぜひ足をお運びください。（権）

Facebook　Twitter

編集・発行　弥生神社
海老名市国分北二-十三-十三

表紙の写真: 壱岐の勝本港から辰の島へ向かう海上より